

●春日部市民文化講座（第 7 回） 「千利休のわび茶 ～その 2 ー利休の弟子たちー」

◆日時：2013 年 9 月 25 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■わびの哲学、美意識とは？

前回のお話の中で、「千利休のわびって、こんなものだと私は思います」とお話しましたが、秀吉から「切腹」を申し渡され、一旦堺に蟄居させられてから、3 月 28 日の寒い時期に聚楽亭に呼び戻され、聚楽亭の利休が造った茶室の中で、しかも小間で切腹させられたのです。この小間というのが「わび」を考える時のキーワードなのですね。

■信長の茶道具狩りと茶の湯御政道

千利休も、最初は室町時代の形式に則った茶の湯を行い、室町時代の茶道具を使っていました。中国からの渡来品・唐物が最高の道具だった訳です。唐物が欲しくて堪らなかったのが織田信長です。ところが、それらは堺の商人たちが持っていた訳で、信長は“茶道具狩り(名物狩り)”をやり、集めた天下の名物を一堂に展示して、褒賞として有能な者にはこれをあげるぞとやったのが“茶の湯御政道”です。それが本能寺の変で全て灰に帰してしまったのです。そこで新しい茶道具として千利休が目利きした道具が脚光を浴びるようになっていくのです。

■利休のわび茶にはカセカセの土器が

皆さんが『楽茶碗』というと照りのある釉薬のかかった茶碗を思い浮かべられるでしょうが、そうではないのです。それは、資料としてこれをご覧になると分かるのですが、千利休というのは、長次郎に最初に造らせたのは“赤”ですね(写真:長次郎“赤”銘「無一物」)。これは土器ですね。僕は 40 年間、「利休のわび茶」って何だろうかって考えて来て、まずこの赤い土塊の茶碗が利休さんの心、そして、こういった黒、かせた黒になるのです。だいたいこの焼成温度は 850 度を上回った程度です。釉薬がやっと溶けるか溶けないかの境で、そのへんの揺らぎが良かったのでしょう。だからこれはみんな長次郎の赤で、カセカセです。私たちが今、楽として見るときには温度が高くなっていますからぺたっとなってますね。じゃあ何で、私たちがどちらかというと綺麗な茶碗でおもてなしをしていたかということ、僕は諸悪の根源は小堀遠州だったと思っています。だから、僕の心にははっきりと小堀遠州以降で茶の湯が変わります。小堀遠州という人は、古田織部が先生なんですよ。古田織部の弟子なんですよ。この人は多才な能力のある人なのです。そこで僕の心の中では線がきちっと引かれております。ですから僕のわび茶は、古田織部までなのです。



■死をもって完成するわび茶

私は 40 年間、表千家で修行してきて、いろいろな人たちと出会い、楽吉左衛門さんとも出会ったりして、今やっと利休さんのわび茶が分かってきました。利休さんにあって茶の湯の完成は「今、この時ぞ、天に抛つ。」自らの死をもってわび茶を完成させたのです。そう僕は理解しています。全ての美は、シンプルな死の中に秘められているのです。生きるということと死は表裏一体です。だから、利休さんのわび茶は己が死んでこそ、捨ててこそその美なのです。だから広間の茶室から、三畳になり、二畳になり、一畳半になって、最後に死ぬ場所も茶室の小間を選んだのです。これ如何に…と、皆さんに聞きたいのです。だから僕が 40 年間、表千家の修行をしてきた結論は、本当に自分の命を削るようなおもてなしができてこそ表千家の茶の湯ではないかと思います。

■利休さんのわび茶を理解していた弟子たち

千利休のわび茶を誰がいったい理解したのか…といったら、やっぱり最初には「宗旦が言いました」と江岑宗左が書いた「江岑夏書(こうしんげがき)」の、まずは七人でしょ、その中で僕は、細川三斎は利休のわび茶を見事に理解していたと思います。そして一番理解していたのは、高山右近だと思います。さらにもう一人、利休さんのわび茶をとんでもなく理解していた人がいるんですけども誰でしょう。利休さんの超弟子の山上宗二(1544-1590 年)です。この人は利休さんとぴったりとくっついていて一弟子です。利休さんが躰いたのは、宗二自身が言っているのですが、「黄金の茶室」を造ったことです。「待庵」を造る前に、利休さんが秀吉の意に沿って、こんなものを造ったのか…と。そこには、宗二と秀吉との確執があったのでしょう。それで、宗二は小田原に身を隠すのです。小田原というところは、秀吉が目の敵にして滅ぼそうとしていたところですから。それで実際に小田原攻めの時に、宗二がそこにいることが分かって、利休さんと再会するし、秀吉の勘気も溶けたかに見えたのですけれども、そこで宗二は鼻削がれ、耳削がれて殺されるのです。小田原の早雲寺にお墓があります。実際に、山上宗二という人は、利休さんのわび茶を仏教の哲学でよく分かっている人だと思います。そして、反対側にいたのが高山右近だったのです。高山右近は全てキリスト教の神学、神の憐れみによって千利休のわび茶を読み取っていたのです。山上宗二はどこまでも仏教哲学で、南蛮の人たちやポルトガル人とか宣教師とかと出会う機会がなかったのです。だからその刺激はなかったの、利休の心の変化が読み取れなかったのだと思います。

■わびとはイエス様の憐れみの心、コンパッション

僕は高山右近と同じキリスト者という立場で「利休のわび茶」を解き明かし始めた時に、表千家の宗匠方は聞こうとしませんでした。そんな中で菅田宗匠という方が「高橋さん面白いことを言うね」とおっしゃってくれました。その頃から僕は、「わびの心はイエス・キリストの憐れみの心。聖書の愛の心だ。わびとはコンパッションである」と。コンパッションという言葉は、英語で「憐れみ」という意味です。ラテン語では二つの言葉が合体してできました。「コム」とは「共に」、「パッション」とは「苦しむ」という意味です。「共に苦しむことは生きること、そして、もてなすこと」です。要するに「もてなす」というのは、その人の心にどこまでも寄り添っていくこと。それを茶室という空間の中でどう表現するかです。今日来てくださった一人ひとりのお客様にどう自分の心を寄り添わせ、おもてなしをするか、それが「わびの心、コンパッション」、愛なのです。どんなにいいお道具を使って、どんなに美味しい料理を出しておもてなししたとしても、愛がなければ虚しいって聖書にあるのですよ。それは、ただの自慢じゃないか、自己主張に過ぎないのではないかということを、茶の湯を習い始めた時に、僕は高山右近の生涯を通して感じたのです。

■高山右近の清いお茶

織田有楽斎という茶人は、凄いいことを言っているのですね。「高山右近のお茶は利休のわびを理解していない。あいつは清めの病にかかっている」と。でも、これは読み解くとねたみですね。自分には高山右近のように清いお点前ができない。まだ何処かでどうだあ～って見得を切る。自己主張してしまうのです。千利休は、そういう「わび茶」を七人の弟子たちとともに探し求めていたのですね。だから僕はね、今、千家の御用学者の人たちに叱られるかも知れませんが、利休のわびの世界は、千利休一人でできたとは思っていないのです。この七人の弟子たち、宗旦が江岑宗左に伝えた七人衆の存在は大きいのですけれども、実はここに大きなミッシングリングがあるので。要するに繋がらない部分があるので。何故かという、この七人のうち五人がキリシタンなのです。高山右近はそのトップです。秀吉から「城を取るか、オレを取るかどっちだ」と言われて、明石城と 12 万石の領地をポンと秀吉に返して前田利家の客将になってしまったのです。でも、彼は茶の湯と信仰を捨てませんでした。そうすると、高山右近という人は、わび茶の中に自分を捨てるという潔さはなかったのです。己が死んでこそ、他の人に自由にもてなすことができる、茶室という狭い空間の中で自分を自由に差しあげることができる。己を捨ててこそ、己が死んでこそ、本当の平和を、茶の湯の一期一会が成り立つ、一座根粒が成り立つということを彼は修道したのですよ。ですから、後世の為政者たちによって意図的に過去が消されてしまったのですね。

■蒲生氏郷と高山右近

蒲生氏郷という人は本当に不思議な人です。彼は病気を患い 40 歳で死にました。若いですね。彼が亡くなる前にどういことが起こったかという、ちょうど中国大陸の明に侵攻するために朝鮮と交渉して、朝鮮を通り道にして明に入っていく。その先方隊が小西行長と加藤清正であり、その後方支援部隊として蒲生氏郷がいたのです。今の佐賀県唐津に急遽築いた城が名護屋城ですが、小西行長と加藤清正は九州の大名でしたから、総力を挙げて造りました。そこに陣屋ができ、蒲生氏郷は後援部隊として行くのですが、そこで氏郷は病気になって会津若松に帰るのですが、その後伏見に帰ってくるのです。この時、高山右近は金沢の前田利家の客将としていたのですが、蒲生氏郷が病気であることを知った高山右近は、自分自身で看病するために伏見の蒲生邸に通うのです。この時、秀吉のキリシタン禁教令がとっても強くなってきたので、氏郷はころぶんです。「私はキリシタンはやめよう」と。ところが、右近は氏郷と信長の時代からの友であり、自分がキリシタンに導いた人ですから一生懸命に看病しながら、キリシタンに戻るように説得したのです。そして結局、蒲生氏郷はキリシタンとして死にました。

■少庵召出状に秘められたお話

蒲生氏郷と徳川家康によって「少庵召出状」が出されたのが、文禄 3 年(1594)と推定されます。前年 11 月に会津に帰国した氏郷ですが、病状が悪化して養生のために京都に上洛していました。その時に、少庵を迎えに行ったのが、あまり知られていないのですが、長次郎の後継ぎの常慶なのです。この人は不思議なことに長次郎と血のつながりがないのです。だけど何故が樂家の二代目になっています。もっと面白いのは、少庵という人も千利休と血のつながりがないんです。この辺のところは、三浦綾子さんが書かれた『利休とその妻たち』の中で、少庵の生みの母親・宗恩はキリシタンだったという説を出しています。少庵が京に帰って来ます。氏郷は、少庵にとって命の恩人であり、その人が今にも死にそうだというので、少庵は蒲生屋敷に感謝に伺うのです。そこには、高山右近が居ました。虫の息の氏郷と少庵が会いました。その直後、少庵は高山右近を招いて、かつての利休の屋敷で茶会を開きます。その時に、家族がバラバラでしたので一緒にいなかった宗旦、お寺で小僧をしていた息子の宗旦も客として迎えます。宗旦はまだ少年です。少庵は、高山右近と宗旦に心の底からのもてなしの茶会をしたのです。

この回では「コンパッション(⇒共に苦しみながらも生きてもてなすこと)」という姿勢を勉強することができました。